

わたしを離さないで　ーロストコーナーー

校長 村井 浩昭

「しぐるるやしぐるる山へ歩み入る」は種田山頭火の自由律俳句である。「時雨しぐれれている山に向かって歩いて入っていく」という意味だ。NHK連ドラ「虎に翼」の主題歌、米津玄師の「さよーならまたいつか」の二番は、「しぐるるやしぐるる町へ歩み入る」から始まる。「毎日－Every Day」には、「ぢっと手を見る」という石川啄木の「一握の砂」の一節があり、映画「シン・ウルトラマン」の主題歌「M八七」の歌詞には、つい先日亡くなられた現代日本を代表する詩人、谷川俊太郎の代表作「二十億光年の孤独」の「万有引力は引き合う孤独の力である」の影響が見られる。作者や作品へのオマージュを込め、自分の感性に置き換えながら制作しているのだろう。

そもそもこれらの楽曲が入ったアルバムのタイトルは「LOST CORNER」、ノーベル文学賞作家カズオ・イシグロ氏の代表作「わたしを離さないで」に出てくる「ロストコーナー」から引用したと米津氏もインタビューで答えている。キャシーの一人称で語られるこの小説は、ヘールシャムという寄宿舎での生活の懐古から始まる。トミーやルースや他の仲間とともに過ごす奇妙で不思議な日々。成長していく過程で、実は自分たちがクローン人間で臓器提供者として生まれてきたという現実を知る。

ある時、ヘールシャムでの地理の授業で、イギリス東端のノーフォークは「ロストコーナー」だと教えられる。その意味は「忘れられた土地」だが、生徒たちの間では、「遺失物保管所」というもう一つの意味で広まり、国中の落とし物がノーフォークに集められるという噂を信じる。失くしたカセットテープを探しにノーフォークへ旅するキャシーとトミー。カセットテープの三曲目が「わたしを離さないで」だ。「ネバーレットミーゴー　オー　ベイビーわたしを離さないで・・・」繰り返されるこのリフレインが、キャシーの胸に響いている。偶然にも中古雑貨店で同じカセットテープを見つける二人。信じることで得られる希望と幸福感。

しかし、待ち受ける運命は変えることができず、希望は砕け散ることになるのが、この物語の残酷なところである。提供者としての役割を果たしながら、友人や夢を失い、自分の命まで失う。作者は、何を投げかけているのだろう。私は読み終えたとき、喪失感の中で考えた。どんなに自由に生きても、人間である以上制限は必ず付きまとう。私たちを支配する枠組の中で、いかに希望を見出し、絶望と闘うか。私自身の「ロストコーナー」に失くしたものがあると信じながら。